

創立60周年
since 1962

東京バッハ合唱団 月報

[第722号] 2022年8月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.722

August 2022

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

東京バッハ合唱団、61年目の始めの一步

富士山の夢

大村 恵美子 (主宰者)

わが国のテレビでは、一日中、いずれかの局で、富士山の偉容が私たちの目に現われています。でも私などは、またか、とは感ずることなく、接するたびにその優美な姿に喜びを満喫しているのです。

高齢に達した私は、なるべく「いつ死ぬのか」と自分のことを想像したりする話はしないようにして、自分では、もうこれだけしあわせに過ごさせていただけただから、あとは感謝して天国に迎えてくださる日を待ち望むのみ、と思っています。

実際に富士山の近くまで、足で登ったのは、中年になって1回、富士山の5合目まで行って、数種類のきのこの入っているお澄ましを、存分に賞味して帰る、というバスツアーに参加した時でした。その5合目から頂上までが、本当の登山になって、それはそれで、テレビで見たことがあり、何のトレーニングもしたことのない私の身体では、全然不可能なことが歴然だったので、うらやましいとも思いません。

そんな私でしたが、この6月29日早朝に、夢の中で、富士山の山腹、けっこう平らな地で、グループの人たちと、「せっかくここまで来たのだから、記念写真を撮りましょうよ」といって、そのあたり一面に藤色に咲いている、名前は知らないけれど、〈つつじ〉に似たような花のそばに集まって、ポーズを構える——そこで目が覚めてしまったのです。起きてからは、しばらく茫然としていたのですが、この3日後の7月2日には、東京バッハ合唱団の〈創立60周年記念会〉をすることになっているので、きっとその刺激でこんな夢が生まれたのでしょう。

日本人が日常このように、富士山と一緒に暮らしているのは、私にはとてもありがたいことのように感じられます。外国の人々が日本人のことを、どのように思っているのか、わかりません。歴史的に、ある時期、とても好戦的で他国を攻めたり、相手を野蛮な態度で扱ったりした、いやなことばかり重ねた時がありました。若かった私にも、ずっとそれが苦しい重荷でした。でも、富士山と桜、南北にまたがった国の地形による、いろいろな自然の移りかわり、どれを取ってみても、この国は、とても恵まれていて、そこに住む私たちの心がけ次第では、平和を貫いて、人類のために

積極的に生きることが出来る、すばらしい立場になれるのではないのでしょうか？

もっともそのことを自覚して、自国への愛から、この世界全体への、大きく強い愛へと、一生かけて心を開いてゆかなくては——今回の夢は、そんな風に私の心に呼びかけてくれたような気がして、私は、コロナ禍の長びく現状の、暗くなりがちな日々、あらためて明るく取り組む勇気を引き出された思いになったところです。

合唱団の61年目の歩みは、こんな目覚めの朝から始まりました。



創立60周年記念の祝会

ソプラノ独唱と新曲披露とコラール

2022年7月2日、荻窪教会

<プログラム>

- コラール……BWV12-7(合唱とオルガ)
- ソプラノ独唱……BWV199-4 アリア
- 合唱……大村恵美子(詞/曲)「今この地球に」、松尾茂春(詞/曲)「キラキラ星変奏曲」
- みんなで合唱……BWV12-7「神のみわざこそ」、BWV147-10「イエス わが喜び」

<演奏>

[ソプラノ]光野孝子、[オーボエ]椿 高明
[チェロ]椿 周、[オルガン]田尻明葉
[合唱]会場の皆さま&東京バッハ合唱団
[指揮/訳詞]大村恵美子

■(上) 祝賀の記念品を贈られる主宰者

■(下) 参加のご来場者とともにコラールを歌う。

画面右のオルガンは、直前に設置された新オルガン(北イタリア、アンドレア・ゼーニ氏制作)

写真: いずれも千葉光雄(団員)



月報 2022年8月号 CONTENTS

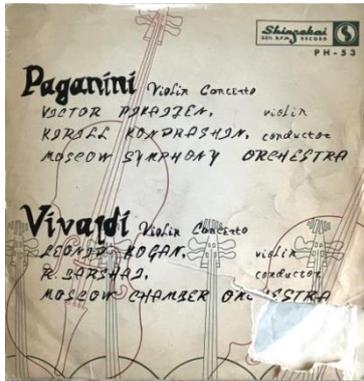
- ・1枚のレコードからウクライナを想う(松尾浩之) p.2
- ・東京バッハ合唱団 入団の恵み(尾形仁美) …p.2-3
- ・連載: 退屈するのはいそがしい [18] (大野博人) …p.4

1枚のレコードからウクライナを想う

松尾 浩之 (団員)

ここに、約 60 年前の 33 回転の LP レコード 1 枚を紹介することから話を進めていくことにしたい(写真)。

写真からではわからないが、神田神保町で旧ソ連などの演奏を日本国内でレコードとしてプレス・販売していた新世界レコード社が、約 60 年前に世に出したものである。旧ソ連製レコードと言ってよいだろう。なお、同社は 2007 年に廃業した。



A 面は、「パガニーニ作曲のヴァイオリン協奏曲二長調」、これはウクライナ共和国(当時ソ連邦構成共和国)キーウ出身のヴァイオリニストであるヴィクトール・ピカイゼン(1933~)が、モスクワ交響楽団と共演したものである。

注目して頂きたいのは、世界的巨匠が演奏している B 面(写真ジャケットでは 2 曲目)の「ヴィヴァルディ作曲のヴァイオリン協奏曲ト短調」である。ウクライナのドニプロペトロウシク州出身で、ヴァイオリンの世界的巨匠にまで上り詰めていたレオニード・コーガン(1924~1982)その人が、モスクワ室内管弦楽団と共演したものである。

さて、60 年前に小学生 4 年生であった私(当時ヴァイオリン学習 5 年)がこのレコードを手にした経緯は、当時、スズキメソード(才能教育研究会)の創始者・会長である鈴木鎮一氏が、コーガンと親交があったこともあり、ヴァイオリン教室の副教材として同レコード購入が推奨されていたからである。

その頃のスズキメソードでは東京千駄ヶ谷の東京体育館で毎年全国から 1000 人を超える生徒を集めて「グランドコンサート」を開催していたが、レオニード・コーガンも恒例の来賓として招かれ、キラキラ星をはじめとした子供たちの合奏に耳を傾けたというような記憶がある。記憶違いならお許し頂きたい。

私は、その B 面に収録されているヴィヴァルディの協奏曲ト短調を最初は学習目的で繰り返し聞いていたが、コーガン演奏の素晴らしい音色に深く魅了されているうち、同ト短調が最も愛す曲になってしまった。

子供時代のヴァイオリン学習は、残念ながら小学 4 年生で中断となった。そのため、私にとっての同ト短調の学習は未完のままとなっている。だが、コーガン演奏、とりわけ同第 1 楽章は、その後も数十回は聞いたと思う。そして、レコード時代が過ぎ去っても、このレコードはお宝として大切に保存している。

ここで、今世界の耳目が集まるウクライナと関係の

深い音楽家について、簡単にふれておこう。今回調査してみて巨匠、有名人が多いことに驚いた。枚挙に暇がないので、ごく一部に絞って列挙してみた。

・作曲家ピョートル・チャイコフスキー(1840~1893)の祖先は、ウクライナ・コサック出身家系と言われ、またキーウ音楽院の創設にも関わったことから、同学院は、ソ連解体後の 1995 年から「国立チャイコフスキー記念音楽学校」が正式名称となっている。

・同じく作曲家・ピアニストのセルゲイ・プロコフィエフ(1891~1953)は、最近よく耳にする地名ドネツク州出身。

・ダヴィッド・オイストラフ(1908~1974)は、オデーサ出身でコーガンと並ぶ大物ヴァイオリニストであった。

・著名なピアニストであったウラディミール・ホロヴィッツ(1903~1989)は、首都キーウ出身である。

・指揮者・作曲家・ピアニストのレナード・バーンスタイン(1918~1990)は、米国生まれで同国を代表する音楽家であるが、両親はウクライナ出身である。

以上ウクライナから、無視できない数の著名音楽関係者が出ていることから想像するに、ヴァイオリンをはじめとした名器、歴史的価値ある楽譜等も数多く所蔵されているだろう。無事保護され続けられることを祈っている。

私は、本年(2022年)69歳になるが、6年前に大人のスズキ教室に復帰した。ヴィヴァルディ協奏曲ト短調より広くポピュラーな曲となっている同協奏曲イ短調第 1 楽章を再学習中で、本年 7 月の発表コンサートでは、ソロで演奏予定である。これ乗り越えたいよ、未完のト短調に向かって精進していきたいと思っている。もちろん、東京バッハ合唱団の練習も手を抜かずに。

(2018年8月入団、テノール)

東京バッハ合唱団 入団の恵み

尾形 仁美 (団員)

私は今年 3 月に東京バッハ合唱団をはじめ訪れ見学させて頂きました。ちょうど創立 60 周年記念公演に向けて団員の皆さんが熱心に練習に取り組んでおられる最中でした。私は皆さんのすばらしい歌声を聴いて、私も一緒に歌ってみたいという思いが与えられ、翌月入団させて頂きました。

まだ入団したばかりだったので、60 周年の演奏会には間に合わないと思いましたが、団員の方々からも「一緒に歌いましょう」と声をかけて頂きました。入ったばかりなのに、このように受け入れてくださった事をとて嬉しく思いました。でも同時にバッハのカンタータが歌えるだろうかという不安もありました。少し迷いましたが、せっかくだいたこの恵みの機会、

出演させて頂けるのなら一生懸命に練習に取り組みたいと思いました。

団員専用サイトの音取りの配信はとても有り難く、この音源にどれだけ助けられたかわかりません。難しいメロディや何度練習しても取れない音もありましたが、自分はあまり歌えなくても、ソプラノの皆さんの歌声に助けられて自分も歌えるような気持ちになって声を出すことができました。練習をしていて感じたことは、バッハの曲は音がおもしろく心地よいということでした。またバッハの歌詞を日本語で歌うことができるので、聖書のみことばが心にスッと入ってきて、喜びをもって歌うことができました。全体練習ははじめの頃は少し緊張しましたが、だんだん楽しくなり練習日が待ち遠しく感じるようになりました。またアルト、テナー、ベースのすばらしい生の歌声を身近で聴きながらソプラノを歌うことができ、なんて贅沢な時間だろうといつも思っていました。

当日（5月14日）演奏会の本番はとても緊張しました。でも私の人生にとって本当に特別のすばらしい1日となりました。杉並公会堂の立派なコンサートホール、生のオーケストラ、素晴らしいソリストたち、そして大村先生の見事な指揮のもとで歌えたことを神さまに感謝します。

東京バッハ合唱団を通してバッハに出会えたこと、また、バッハを通して神様への素晴らしい賛美に出会えたことを心から主に感謝しています。これからも皆さんと一緒に歌えることをとても嬉しく思っています。どうぞよろしくをお願いします。

(2022年3月入団、ソプラノ)



■ネモフィラ
写真：
千葉光雄

【既刊楽譜】作曲アイデアの素材から見渡してみる

バッハ・カンタータの场景 №11

大村 健二（団員）

出版計画の現在地

2000年から、大村恵美子の日本語訳詞を並記したブライトコプフ社底本のピアノ・ヴォーカル譜を自費出版しつつ定期公演に使用し、銀座の山野楽器や教文館などの店頭でも販売しています。既刊点数は、教会カンタータでは79曲に至っています。この創立60周年を期して、残りの110曲余を10年間で追加出版して全巻を完結しようとする計画が、ドイツの上記版元の協力を得て進行中であることには何度か触れました。

第1年次の曲目は、BWV 2, 3, 5, 7, 9, 10, 11, 12, 13, 18, 20, 22の12作品ですが、訳詞者のたつての希望でBWV 171を加えます（20と差し替えか?）。

そのうちの3曲（上掲太字）は、下の公演予定にあるとおりで、この6月からの練習開始に間に合わせるべく先行して仕上げました。目下、BWVの若い順に制作が進んでいます。以前に版下づくりの工程をご紹介したことがありますが（2020年5月号）、このたびは、校正の段階での訳詞者による歌詞の改訂、割りふりの変更などが多くなりました。60年におよぶ訳詞作業と練習現場での実践、上演本番の経験などを積み重ねて、いよいよ歌いやすく、いよいよ精緻にと、進化をつづけていることをご報告します。（この項、つづく）

2022-2023 シーズンの公演予定

●クリオラ・シングイン 2022

～みんなで《クリスマス・オラトリオ》を歌いましょう～

日時：2022年12月3日（土）、14時から

会場：荻窪教会

昨年初めて開催して好評だった、ぶっつけ本番でバッハの《クリスマス・オラトリオ》（略して「クリオラ」）を、オケ付きで歌ってみる試みの第2回。今回は後半（第4-6部）を中心に合唱部分を抜粋して歌います。ただし冒頭の“Jachzet frohloeket”（喜べや この佳き日を）は今回も歌いましょう。この半世紀、わが国にもクリオラ経験者が増えました。ドイツ語でも英語でも日本語でも、楽譜持参でお集まりください（細目計画中）。「忘れた」という“ご仁”に朗報——8月以降の通常練習時に、合唱部分をさらってゆく予定です。ご参加ください。

あわせて、当日は松尾茂春作曲《キラキラ星変奏曲 No. 7-13》（クリオラ後半の並行部分）の初演披露も予定しています。

●第122回定期演奏会

日時：2023年5月6日（土）、14時開演

会場：川口リア音楽ホール

- ・カンタータ第12番《泣き 歎き 憂い 迷い》BWV 12
- ・カンタータ第22番《イエス 十二弟子呼びて言いたもう》BWV 22
- ・昇天節オラトリオ《頌めよ 神のみ国》BWV 11
[独唱] 光野孝子(S), 谷地畝晶子(A), 鳥海寮(T), 小藤洋平(B). [管弦楽] ARS(コレギウム・アルモニア・スペリオーレ・ジャパン), [オルガン] 田尻明葉, [指揮] 大村恵美子

団員募集（日本語演奏）

上記定期演奏会への合唱参加者を募集します

<練習開始> 8月6日（土）より

毎週土曜 15:30-17:30、荻窪教会にて

（他に、月1回、目白聖公会でも練習します）

<練習曲目>

第122回定演の曲目（上記3曲の合唱部分）。

ほかに、12月までは、バッハ「クリオラ」（冒頭と後半3部合唱部分）、松尾茂春《キラキラ星変奏曲No.7-13》も、同時に音取りします。

<楽譜> いずれも練習会場にて販売します。

◆上演用歌詞対訳は、当団HPからご覧いただけます。
http://bachchor-tokyo.jp/japanese_words/index.htm

どうして安曇野？

安曇野閑人 大野 博人

この連載を読んでくれた友人から感想が届いた。移住をうらやましいと思ったという。でも、どうして安曇野なのか、と尋ねられた。

安曇野が最初にあったわけではない。「どこかに移り住みたい」という思いが先だった。移る先に具体的な考えはなかった。

退職したら首都圏から離れて暮らしたい。でもどこにしようか。移住計画はそんな風に始まった。夏に涼しいところがいいというだけで、特定の地域へのこだわりはなかった。どこでも候補になりえた。とはいえ、日本中を回って、各地を比較検討するのは無理だ。

とりあえず、どこか行ってみて、それを手がかりに考え始めようか。まず頭に浮かんだのは長野県の松本市だった。住んだことはない。ゆっくり訪ねたことさえない。けれども、ある本を読んでからずっと、その地名が頭に刻み込まれていた。北杜夫が自らの若き日々を描いた「どくとるマンボウ青春記」である。

敗戦直前に入学した旧制松本高校が主な舞台の一つとなっている。

「ある教師は、終戦の翌日、生徒たちを整列させておいてこう述べた。『負けるが勝ち、ということもある』幼稚園ではあるまいし、この訓話もちょっとひどすぎる」

こんな風にして、それまでの制度や権威、価値観が一挙に崩壊した。生徒も教師も慢性的な空腹とともに突然もたらされた自由の中で新しい生き方をさぐり始める。食糧不足をアマガエルまで食べてしのぎ、ほとんど風呂にも入らない生活をしながら、意味のわからないままゲーテを読みカントを論じる。寮の中を深夜、大声でがなり練り歩く「ストーム」という馬鹿騒ぎを繰り返しながら、山に上って若者らしい感傷にふける。多くの教師が追放され、生徒たちが自治を高く掲げる。そんな時代を生き生きとユーモラスに綴っている。

この本を読んだ50年ほど前、私は地方の高校生だった。おりしも経済成長路線へと日本社会全体が突入し、私もそのための戦士を養成する受験戦争の渦中に呑み込まれていた。そんな高校生にとって、どのページもまぶしいばかりの光を放っていた。



■今は博物館の一部となっている旧制松本高校の校舎

私だけでなく、同級生の多くもこの本で、旧制高校的な教養主義にあこがれを抱いた。試験のための参考書を脇にどけて、デカルトやゲーテ、ドストエフスキーに挑んだり、背伸びしてクラシック音楽などを聴いてみたり。そうやってバッハやモーツァルトにも出会うことになった。「松本」は、強烈な読書体験とともに忘れられない地名となっていた。

だから、とりあえず移住の候補地として松本を訪れてみた。

いい街だと感じた。もちろん、私たちは年金生活者であって、高校生ではない。それでも、松本平の向こうにそびえる北アルプスの姿には、若者でなくとも心を揺さぶられた。日常の買い物など生活面でも暮らしやすそうだった。

ただ、住宅街はというと、首都圏とそれほど変わるわけではない。戸建て住宅の敷地はやや広いし、アパートも超高層ではない。それでも、醸し出す雰囲気は都会的だ。住んでいた横浜の住宅街とも似ている。

求めているのはもっとちがうところのような気がする。そう思いながら、車でとなりの安曇野市に入ったとたん、目の前に田園風景が広がった。その背景には山頂に雪を残した北アルプスの山々が連なっている。そのすそ野の緑の中に広がるのどかな街並み。

それに松本市の中心部まで車で30分ほどと近い。「セイジ・オザワ 松本フェスティバル」が開催されるくらいだ。魅力的なコンサートも少なくないだろう。弦楽器の教育法として世界的に知られるスズキメソッドの発祥の地でもある。アマチュアでも上手な奏者が多く市民の音楽活動もさかんはず。

ここにしよう。さっそく地元の不動産屋に飛び込んだ。あとのことは、ほとんど考えなかった。地元の人と親しくなれるかどうか、医療環境は整っているかどうか……。

つまり、私の場合、たくさんの候補を念入りに調べ比較して安曇野にたどり着いたわけではない。今、私は快適に暮らしているが、それは、松本への勝手な思い込みと、安曇野の風景への衝動的な反応の結果にすぎない。

私のやり方は、移住先をさがす上でおよそ合理的とはいいがたい。これから、地方への移住を考えている方がいらっしゃるとしたら、どうか私のまねをなさらないように。

(団友・後援会員、元朝日新聞記者。写真・説明とも)

[編集後記]

- ・この夏の唯一の公演予定(8月の小布施公演)が、現地のコロナ感染発生で中止になったことは、すでにお伝えしました。昨年は、東京の事情(緊急事態宣言の発令)による中止、その前年(2020年)もどんな状況だったのか、忘却の彼方ですが、とにかく「自粛」でした。
- ・小布施、野尻湖……、と信州が遠ざかります。安曇野の風をお送りくださるのが、なによりの救いです。(K)